

【事例紹介】

## 国際共修の効能と課題

### －コミュニケーション能力の向上を図る3大学実践事例－

#### Efficacy and Challenges of International Co-learning: Practice of 3 Universities for Development of Communication Skills

岩手大学 教育推進機構 グローバル教育センター 尾中 夏美

ONAKA Natsumi

(Iwate University)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター 高橋 美能

TAKAHASHI Mino

(Tohoku University)

神戸大学 国際連携推進機構 国際教育総合センター 黒田 千晴

KURODA Chiharu

(Kobe University)

キーワード：国際共修科目の実践、留学生と国内学生の意味ある交流の創出、グローバル化

### 1. はじめに

近年国内の高等教育機関で広まりつつある、留学生と国内学生の「意味ある交流 (Meaningful Interaction)」を通じた学び合い学習、「国際共修」に焦点を当てた事例を報告する。本稿は2019年8月に実施された留学生教育学会年次大会での同題の共同発表を、事例報告にまとめたものである。特色、規模、立地の異なる国立3大学を対象とし、国際共修の根幹となる、学習者間、学習者・教員間のコミュニケーションに着目し、効果的な教育介入、学習効果、教育実践における課題等につきそれぞれの実践事例を紹介する。

本稿のテーマである「国際共修」について末松 (2019) は次のように定義している。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (Meaningful Interaction) を通じて多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に、同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループ・ワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ

(考察・行動力) やコミュニケーションスタイルから学び合い、知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。 (末松、2019, iii)

日本国内における国際共修科目の実践数については実態把握が難しいが、高橋(2019)は日本の国公立大学の7割が国際共修科目を開講している可能性を指摘しており、その実践報告を含めた論文数も近年、急増している(末松, 2019)。筆者らが関わった国際共修実践事例調査の成果物、『留学生と国内学生が共に学ぶ国際共修:教育実践事例集』<sup>1</sup>にその実践例の一部を見ることができる。調査では、実践者へのインタビューやアンケートを通して、組織としての取り組みというより、教員個人が試行錯誤を重ねながら授業実践に奮闘している実態が垣間見えた。

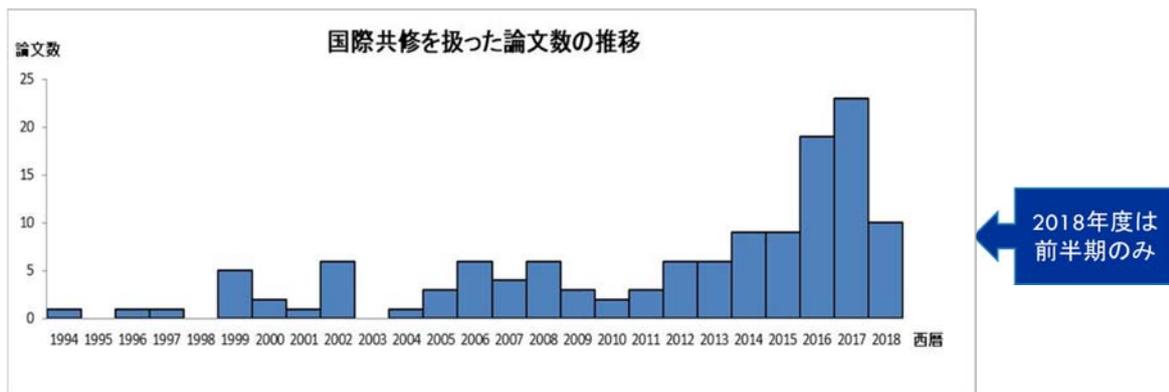


図1 出典：末松和子(2019)

第2項からは国際共修の学習効果の一つとして、多くの先行研究でスキルの向上が特記されるコミュニケーションが、授業実践における最大の課題であることを示した上で、大学の教育理念や目標、また留学生を含む学生数の異なる東北大学、神戸大学、岩手大学でそれぞれ実践している国際共修の事例を、(1) 概要、(2) 実践における工夫、(3) 授業・学習成果、(4) 課題、の過程で顕在化した国際共修実践や教育の発展に関わる課題、の観点より整理・提示する。

## 2. 東北大学の事例

東北大学は国際共修授業の開発、実践を積極的に行っており、国立大学で最多の授業提供数を誇る(高橋 2019, 7 頁、高橋 2020, 84 頁)。教授言語は英語か日本語によるものが多く、授業手法も課題解決型やプロジェクトを取り入れて学生参加型で展開されるものなど様々である。例えば、地域連携を目的とした授業例として、仙台のすずめ踊りや七夕祭りに受講生が参加するもの、学内で留学生と国内学生がイベントを共同企画・実施するもの、留学生と国内学生による共同で映画を製作するもの

<sup>1</sup> 文部科学省科学研究費基盤研究(C)「グローバル人材育成における国際共修：教授法の確立に向けて」(研究代表者：末松和子)で2016年に作成された。

などがある。

本稿では、2019年度前期に実施した国際共修授業「国際理解教育の実践」（全15回）を紹介する。

### (1) 授業概要

受講者数：13名（留学生10名、国内学生3名）

教授言語：英語

授業実施の場所：教室

授業の内容／構成：前半10回は国際理解教育に対するユネスコの方針や各国の実践状況を学び、留学生と国内学生が議論・アクティビティを通して知識と理解を深める。後半4回はグループプレゼンテーション。留学生と国内学生が重要だと思える教育課題を決め、解決策を提案する。最終回は振り返りと期末試験を実施する。

評価方法：出席・授業貢献度、グループプレゼンテーション、課題提出、期末試験

### (2) 実践における工夫

まず、初回と最終回に言語の壁に関するアンケートを配付し、言語の壁について意識化し自身の意識変化について確認させた。クラス内には多様なバックグラウンドの学生が集まることから、受講者間に言語の壁がある。そこで、初回の授業でまず学生に言語の壁をどのように乗り越えるのかについて尋ね、2回目の授業時に教員の方からアンケート結果を紹介して、相互にサポートすることを促した。最終回の授業では、受講者に言語に関して他者をサポートしたのか、またされたのかについて、経験を振り返り、体験を通じて学んだことを振り返ってもらった。

2つ目は、初回授業で受講者がクラスルーム・ルールを考える時間を設けた。これは、受講者が主体的に授業に参加するために、互いに気を付けるべき点を考え、クラス内のルールとして適当であるかを受講者と共に検討し、クラスルーム・ルールを設定することだ。受講者自身が考えたルールに則って授業を進めることで、民主的なクラス運営を行うことができた。

3つ目は、毎回授業後に実践者である教員がティーチングアシスタント（TA）と振り返りの機会を持ったことである。TAには授業準備・運営の補助をお願いしているが、それだけでなく授業中受講者一人ひとりの態度や行動を観察し、注意やアドバイスを行ってもらった。同時に、観察記録をとってもらい、授業後に振り返りの時間を設け、筆者と授業の改善点などを話し合った。また、グループワークを行うメンバー構成についても、国籍や性別だけでなく、参加者の積極性なども考慮しながら、二人で話し合いながらマッチングを考えた。

4つ目は、筆者は受講者との対話を大切にしながら、提出された課題にフィードバックを行った。対話・提出物・振り返りシート等から得られた学生の意見は、授業改善に反映させた。民主的な授業運

営に努め、授業中受講者の意見を聞くことはもちろんのこと、授業後に振り返りシートを配り、受講者が記入した意見を参考にしながら、授業改善に役立てた。

5つ目は、ディスカッション、ディベート、ゲストスピーカーなど、講義以外の手法も取り入れ、毎回授業の方法を変えた。毎回同じ手法を進めると、パターン化されてしまい、受講者の積極的な参加が期待できないことが課題となったため、多様な手法を取り入れながら授業を進めた。

6つ目は、留学生と国内学生の交流を促進するため、毎回メンバーを変えながらグループ活動を取り入れた。ただ、メンバーを変えすぎると参加者同士の関係性構築が難しくなるため、教員とTAは後半のグループプレゼンテーションまでに、活動する上で最適だと思われるメンバー構成を話し合いながら決定し、固定メンバーで最後のプレゼンテーションの準備にあたってもらった。

### (3) 学習成果

- ①学習テーマに対して、多様なバックグラウンドの学生と共に深く議論することで、メタ認知的な理解が得られ、レベルの高い学びが獲得できた。
- ②他者と議論する力、他者の意見を聴く姿勢が身につく、コミュニケーション能力の伸長が図られた。
- ③多様なバックグラウンドを持つ受講者と意見交換・共有する中で、言語の壁を乗り越え様々な差異を調整する技能・態度を身につけることができた。

### (4) 課題

これらの学びは、国際共修授業という多様なバックグラウンドの受講者が集まることで得られる成果と考えられる。しかし、以下のような課題も残されている。

- ①国内学生のドロップアウトが発生する。国内学生にとって国際共修授業を受講する理由や目的は異なる。例えば留学に向けた準備のため受講する学生がいるが、いざ留学が決まると参加を辞退するケースも出てくる。また、国際共修授業が必修化されていない、卒業単位にならないなどの理由で、途中で参加を辞退する学生もいる。理由は様々であるが、国内学生のモチベーションの維持は大きな課題である。
- ②国内学生の語学力のさらなる向上が必要である。国内学生が英語で授業を受講するためには高度な英語力が必要となる。この点で参加を断念する学生もいるが、実際に受講しても英語でディスカッションしたり、プロジェクトやプレゼンテーションをしたりすることに抵抗のある学生も多い。筆者の実践では、事前に授業でディスカッションする内容をリーディングやワークシートを課題として渡し、準備してから授業に参加するよう伝えている。また、先に工夫点でも紹介したが、初回・最終回の授業でアンケートを配付して、クラス内での言語支援を呼び掛

けている。その他、日本語の補足資料の配付や授業後のサポートなども必要に応じて行っている。

- ③学生の参加意欲を促進するアクティビティのさらなる開発が必要である。筆者の授業は、ディスカッションやアクティビティを取り入れながら進めているが、アクティビティは多様なバックグラウンドの学生が学び合う中で有効であることを確認してきた。そのため、アクティビティの開発は必須であると考えている。
- ④学生間のプロジェクトへの貢献度がアンバランスになる傾向がある。①とも重なるが、国内学生に限らず、受講者によって授業へのモチベーションが異なり、テーマに対する興味・関心の程度が一人ひとりの授業へのコミットメントに大きく影響することが確認されている。ただ、グループ内で貢献度に差が出てくると、積極的な受講者もモチベーションを下げる結果となりかねず、この点も注意が必要である。

以上のように、国際共修授業の実施、運営には様々な課題が残されている。ただ、先に述べた学習効果という点では、多様なバックグラウンドが集まるからこそ得られる学びも多く、国際共修授業を実施する意義は大きい。今後も、課題への解決策を講じながら、国際共修授業を通じて受講者が多くの学びを得ていくことを期待する。

### 3. 神戸大学の事例

次に神戸大学の事例を紹介する。神戸大学では全学共通授業科目として、国際共修科目「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」を開講している<sup>2</sup>。多様な言語・文化背景を持つ受講者（国内学生と留学生）が、神戸大学国際学生交流シンポジウム<sup>3</sup>を行うという共通の目的の下、企画・準備・当日の運営において協働するプロセスの中で相互に学び合うプロジェクトベースの授業である。本授業ではプロジェクト遂行に関わる一連の過程において、受講者が文化接触に伴う葛藤などを克服しつつ、多様な他者と協働するために必要な異文化間コミュニケーション能力やリーダーシップを涵養することを目指している。2019年度後期に実施した授業の概要は以下の通りである。

<sup>2</sup> 当該科目の授業設計については、黒田・ハリソン（2016）を参照されたい。

<sup>3</sup> 神戸大学国際学生交流シンポジウムは、毎年12月に学外の宿泊施設で1泊2日の日程で開催している。シンポジウムには、国内学生・留学生計50名が参加し、日・英のバイリンガルでディスカッションやプレゼンテーションを行う。2019年度第25回神戸大学国際学生交流シンポジウム実施報告は、以下のホームページを参照されたい。

[https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2019\\_12\\_16\\_01.html](https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2019_12_16_01.html)

## (1) 授業概要

受講者数：19名（留学生14名・国内学生5名）

教授言語：日本語・英語

授業実施の場所：教室（14回）及び学外宿泊施設で実施する1泊2日のシンポジウム（2回分の授業としてカウント）

授業の内容／構成：母語や出身国・出身地域、学部・学年が多様な受講者が、シンポジウムの企画・準備・当日の運営、シンポジウム終了後の報告書作成等、一連の活動に従事する。1～4回の授業では、当該年度のシンポジウムのメインテーマ及びサブトピック、1泊2日のシンポジウムのタイムスケジュールやレクリエーション活動の内容等について、当該授業のコミュニケーション言語である日本語及び英語で議論を重ねて決定する。5～10回の授業では、3～4名の小グループに分かれて、シンポジウム参加者募集のためのポスター作製、申込フォームの準備、メインテーマ及びサブトピックに関連する資料収集と資料作成を行う。11～12回の授業として1泊2日のシンポジウムを実施し、13回～15回の授業では、一連の活動の振り返りとして報告書を作成し、グループとしての活動内容を振り返る最終グループ発表を行う。学期末に提出する最終個人レポートでは、各受講者が多様な言語・文化背景を持つ他者との協働を通して得た気づき、また葛藤や困難を振り返り、それらの体験を通してどのような学びを得たのか総括する。

評価方法：授業・シンポジウムへの参画、授業外でのグループワークへの参画、シンポジウム報告書の作成（グループ毎）、最終グループ発表（日・英）、最終個人レポート

## (2) 実践における工夫

本授業では受講者間の相互の学びを促すために、以下のような教育実践上の工夫をしている。

まず、日本人（筆者）と同僚のイギリス人教員の2名が授業を担当し、双方が両言語を用いて授業を行う。授業の進行に際し、教員同士がお互いの発話を補足し、受講者にとってより分かりやすく適切な表現に言い換えるなど、助け合う姿を具体的に示すことにより協働するためのコミュニケーションがどのようなものであるか、受講者に気づきを与えられるよう心掛けている。また、各回の授業終了後、オンライン学習管理システム（Learning Management System、以下LMSと記す）のフィードバック機能を用いて、各受講者が議論への参加度や自己と他者のコミュニケーションについて省察を行う機会を設けている。教員はその内容を精査し、他の受講者の参考になるコメントを抽出して次週の授業で提示し、個々の受講者の気づきや学びをクラス全体で共有している。また、日本語或いは英語でのディスカッションに困難を抱えているといったコメントがみられた場合も、クラス全体で共有する。日本語・英語が母語ではない者とコミュニケーションを取る際にどのような配慮が必要かを考えさせ、言語調整能力を涵養するようにしている。5回目以降の授業は、3～4名の小グループ毎の活動

が中心となるが、グループ分けは教員が行う。各グループのメンバー同士が相互に補い合える関係性を構築できるように、母語、日英の言語能力、学部、学年、ジェンダー等の要素において、可能な限り異なる属性を持つ者同士を組み合わせることとしている。各グループの授業外活動の進捗状況をLMSで把握し、グループ活動に困難や葛藤を抱えている場合は、個別面談による教育的介入を行っている。

### (3) 学習成果

次に、当該授業を通して受講者がどのような学習効果を得ているのか、授業後の省察やシンポジウムの報告書、並びに個人最終レポートの記述内容を元にまとめる。

- ①シンポジウムで取り上げるテーマに関する知識と多角的な視点を獲得することができた。
- ②他者の言語能力やコミュニケーションスタイルに配慮した言語調整能力を身につけることにより、実践的な異文化間能力を獲得することができた。
- ③模範となるピアからタスク遂行過程における勤勉さや緻密さ時間管理などを学び、自らの行動に生かす姿勢がみられた。
- ④多様な他者と協働する中で、他者の能力を生かしつつ、自らの特性や得意分野に応じてリーダーシップを発揮することができるようになった。

開講当初はほぼすべての受講者が、議論の進め方や意見の表出の方法、準備作業の進め方や時間管理などにおいて、自らの慣れ親しんだ方法と異なる方法を取る他者に対して葛藤や混乱を感じていた。授業が進んでいくにつれて、受講者間で相互に学び合う関係性が構築されていき、他者のコミュニケーションスタイルやコミュニケーション・ストラテジーや、物事の進め方を取り入れつつ自己のそれらを再構成していく過程が確認できた。

### (4) 課題

最後に、当該授業における主要な課題2点を挙げておきたい。

- ①当該授業では各受講者が持つバックグラウンドや能力の多様性を学びのリソースとして捉えているが、海外滞在経験を持ち元々高い異文化間コミュニケーション能力を持つ受講者がいる場合、それらの者が他の受講者の学びを大いに促すことがある。このように、ある受講者が授業受講前に既に獲得した能力を生かし「インフルエンサー」として他の学生の学びに大きく貢献した場合、その貢献をどのように評価するべきか検討が必要であると考えます。
- ②学習成果の評価の公平・公正さをどのように保証するかという点も課題である。当該授業科目は、授業での発言や授業後の省察、授業外でのグループ活動への参加、シンポジウム当日の活動や、グループ発表及び報告書、個人最終レポートを累積的に評価しているため、成績評価において絶対評価の方法を取ることが望ましいと考えている。しかし神戸大学では、全学共通授

業科目の成績評価において、SとA合計の割合を概ね20%以下とするという相対評価の指標が導入されており、このような制約の下、学習成果と関連させた成績評価の公平・公正さをどのように担保するのか苦慮することがある。

このように、当該授業では受講者の学びをどのような指標でどのように評価するのが最も主要な課題である。

#### 4. 岩手大学の事例

3例目として岩手大学の事例を紹介する。岩手大学では日本語で実施する多文化コミュニケーションの科目や日英複言語で実施する国際合宿研修などの国際共修科目を提供している。本稿では2018年度実施の「現代の諸問題—英語討論入門」について紹介する。本授業では、国内学生と留学生で異なる目標を設定している。国内学生の目標は英語を「学ぶ対象」から「ツール」へ、友好関係を構築することが主となる国際交流から色々な違いを乗り越えて1つの成果物を作り上げる協働へと意識を変えたとともに、英語での口頭発表に対する自信の涵養である。留学生の目標は異なる文化背景を持つ学生との協働によるコミュニケーション能力向上と日本語での口頭発表をすることによる、日本語使用への自信の涵養である。

##### (1) 授業概要

受講者数：8名（留学生5名、国内学生3名）

教授言語：英語

授業実施の場所：教室

授業の内容／構成：授業はトピックについて賛成・反対の留学生と国内学生混合チームに分かれ、留学生は日本語、国内学生は英語で1回の口頭発表を分担して行う。第1回の授業においてこの授業についてのオリエンテーションを行った後、第2回はテーマに関して賛成反対両方の観点について全体協議をし、ディベートの組み立て方について考える。第3回は留学生と日本人の混合チームに分かれ、くじ引きで賛成・反対を決定し、授業外活動も含めて第4回にかけて発表準備を行い、第5回にそれぞれのチームが一人3分～5分の発表を行う。質疑応答は英語で実施し、相互評価とチーム内の自身について振り返りを行う。これをメンバーチェンジしながら3セット繰り返す。最終回は振り返りシートを使用しての内省を行う。留学生と国内学生がテーマ毎にメンバーの入れ替えをするが、ディスカッションに行き詰まりが見られる場合など教員が介入を行い、リソースの見つけ方、論点の絞り方と整理方法などについて助言を行っている。

評価方法：出席、口頭発表の評価、各発表後の振り返りレポート、最終レポート

## (2) 授業実践における工夫

- ① テーマについては、死刑制度、同性婚、安楽死の是非についてなど国際社会の中で共通し、かつ容易に是非が決定できないテーマを設定することにより、解釈やそれぞれの持つ文化的背景による異なった価値観を協議の中で浮き彫りにする。これにより、互いに想定できなかった多様な観点到に触れ、個々人の考え方の深化を図ることが可能となる。
- ② 自分の信念とは反対の立場での論戦を張る場合があるため、ディベートはあくまでも説得力の技能を競うのであって、個人的心情とは別であることを説明し、客観的かつエビデンスに基づいた発表を行うことを奨励する。
- ③ テーマ毎にチーム構成を変更することにより、より幅広い人間関係構築を促すとともに、それぞれの学びや強みを次のチームで生かすことが可能となる。
- ④ 授業時間内だけでは時間が足りないため、SNS等を活用して時間外での準備も推奨する。留学生と国内学生の接触時間が増えることにより、作業以外の活動への発展が期待できる。

## (3) 学習効果

- ① チームメイトの言語能力に配慮し、流暢に正しく話せることよりも、相手に理解できる語彙や表現、スピードでの意思疎通を心掛けるようになる。留学生から様々な疑問が出されたり意見を求められた時に、自分の言いたいことを的確に表現するためには、必ずしも文法的な正確さのみに拘る必要がなく、むしろジェスチャーやより簡単な表現による意思疎通などが有効であることが体験的に理解できる。英語ネイティブの留学生は、「英語ノンネイティブに判りやすい表現」を意識して話すようになる。
- ② 国内学生だけなら思いつかないような幅広い観点が存在することに気づく。国内学生の中では疑問を感じるようなことのない事象についても、留学生から質問があれば言語化したり調べたりすることにより、「知っていたつもり」「常識のつもり」がそうではないことに気づく。また、同じ事象でも文化によって解釈が異なることへの気づきも生まれる。
- ③ 1つのチーム発表のスライドは日英表記とし、留学生は日本語で、国内学生は英語で口頭発表をさせている。これにより、スライド作成や発表原稿などを互いにチェックし合い、発音しにくい表現を発表者にとって扱いやすい単語に変えるなど配慮することにより、互恵的学習環境を創出する。
- ④ 互いに予定の詰まった者同士で協働作業時間を確保する必要性があることから、時間や約束管理の重要性を認識する。時間管理などに問題があった場合に、異なる文化背景のメンバー間でのどのような態度と言語によるコミュニケーションスタイルで解決していくか、など前提となる

コミュニケーション・ルールの異なる多文化の受講者が様々なコンフリクトを体験することにより、理解がより深まる。

#### (4) 課題

- ①大学では必ずしも英語が堪能な留学生が多くないという現実があるため、学生数確保のためには対象となる留学生の履修科目と被らないように工夫することが重要である。そのため留学生対象のオリエンテーション時にはPR活動を行い、同時に留学希望の国内学生へは積極的な声かけによる履修の奨励が不可欠である。
- ②賛成・反対に分かれてディベートを組み立てるので、一方的な不利が生じないテーマを選択するよう心掛ける。同性婚を選択したとき、社会的には未だコンセンサスが得られていない状況であるが、受講者ではほぼ全員が賛成であり、反対の立場のディベートチームが戦略を立てる上でかなり苦戦する様子がうかがえたため、テーマ選定の方法は工夫の余地がある。
- ③この授業では、個々のコミュニケーション力、リーダーシップ、第2言語の運用力等、質の異なる能力を評価する。そのために、客観的視点に基づく学習効果の検証方法や能力向上の計測に使える評価指標の必要性を感じる。

#### 5. まとめ

今後の課題としては、日本国内での国際共修の実践を拡大していくために、カリキュラムを体系化すること、教授言語、教育介入、専門科目への適用なども含めた教授法を開発すること、そしてこのような実践を通しての学習効果の検証法を確立していく必要があるだろう。コミュニケーション能力向上を測る標準化された指標の開発が必要であることが我々の共通した認識である。今後は寄せられた建設的なフィードバックをもとに、研究をさらに発展させ、日本の国際共修教育・研究の質の向上に寄与したい<sup>4</sup>。

#### 参考文献

黒田千晴・ハリソン・リチャード (2016) 「神戸大学におけるバイリンガル国際共修授業：「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業設計について」『神戸大学留学生センター紀要』22号 pp. 89-105

<sup>4</sup> 国際共修についての国内外の実践例や授業実践のポイントは「国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ」(東信堂)に詳しく記載されている。

- 佐藤智子、高橋美能（2020）『多様性が拓く学びのデザインー主体的・対話的に他者と学ぶ教養教育の理論と実践』「第3章 言語と文化の違いを超えて学生が学び合う国際共修授業」, 明石書店
- 末松和子（2019）「はじめに」末松和子、秋庭裕子、米澤由香子編著 『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, pp. i-vi
- 末松和子（2019）「国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるもの—」『留学交流』Vol. 95, pp. 1-12
- 高橋美能（2019）「国際共修の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生」『留学交流』Vol. 100, pp. 1-13